ささえる力 Power

「ささえる力 Power」は、情熱と誇りをもって働く「人」にスポットをあて水資源機構の仕事を紹介するコーナーです。

公魂民才

～「民」で培った才を「公」のフィールドに～

江戸時代享保年間に農業用水供給のために開削され、今もなお、埼玉県及び東京都への農業用水及び水道用水を供給する基幹施設であり続ける見沼代用水路。総延長約76kmあるこの水路を管理する利根導水総合事業所見沼管理所に、昨年度より経験者採用職員として経験豊富な一人の技術者が加わった。

今回は、“新人”でありながら過去に社会人として得た知識・経験を現在の業務にいかんなく発揮する田中大輔にインタビューした。

見沼代用水位置図

Profile

利根導水総合事業所　見沼管理所

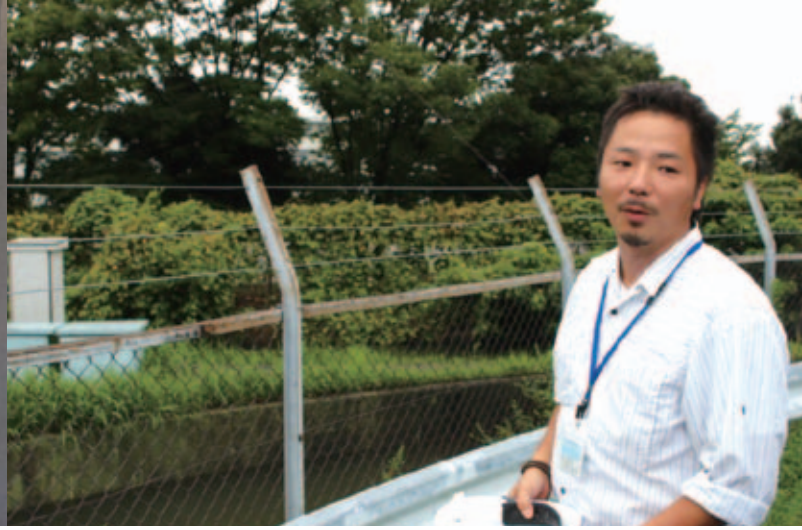
田中　大輔 *Daisuke Tanaka*

国土交通省や水資源機構などの全国各地の現場事務所における現場技術員や、水門メーカーの技術者を経て、平成25年4月、機械職として水資源機構に入社し、現在2年目。水資源機構最初の赴任地として、利根導水総合事業所が管轄する見沼管理所（埼玉県）に配属になる。現在、主に機械設備の保守・管理や工事監督業務などに従事。

技術者としてのあゆみと志望の動機

田中は、現場技術員として技術者のキャリアをスタートさせ、国土交通省、水資源機構、日本道路公団（当時）における全国津々浦々の現場事務所で現場代理人等の業務に従事した外、水門メーカーの技術者など、土木及び機械の分野で約20年にわたり技術者としての経験を積んで水資源機構に入社した。

過去、主に現場技術員、即ち請負者として業務に従事してきた田中だが、今後技術者として更に成長する上で「トータルマネジメントを見据えた時に発注者という立場の経験は必要不可欠」と感じていたこ



とに加え、かつて水資源機構の思川開発建設所（栃木県）で現場技術員（H20～H21）として設計に従事し担当した南摩ダム選択取水設備の建設を是非完遂したいという熱意が、水資源機構入社への志望動機になったという。

水資源機構職員として

田中の現在の業務は、主に見沼代用水路などに係る機械設備の保守・点検等の管理、業務の発注、及び発注工事の監督、さらに日々の水路施設の巡視等々、多岐にわたる。もちろん「新人」でありながらも、その豊富な知識・現場経験を基に、管理所の若い職員へのアドバイスを行うこともしばしばである。モットーは「技術力＝知識（机上）＋経験（現場）」、「自分の管理している施設には『愛』をもって接するようにしよう」。

田中が、業務において特に心がけていることとして挙げたのが、「地域の方々との良好な関係の構築」である。地元の方々からの要望にはできるだけ早く応え、解決するよう、例えば水路敷の草刈りの要望があれば、自ら迅速かつ率先して現場に出動し草刈りを行うことも。「地元の人たちからのお礼の言葉は本当にうれしい。」と笑顔を見せる。

水資源機構職員として約1年半、田中は前職との違いとして「基本的に個として仕事を受けることが多い現場技術員と異なり、現在は発注前から完成、そして管理まで全体を見据えて仕事をしなければならない」こと。とりわけ「機構内外の関係者の多さと丁寧な調整の重要性を認識した」ことを挙げつつ、「機構職員としての業務には判らないことが多くあります。20代の頃のように少しずつですが吸収していることを楽しく感じます。また自分の『技術者』としてのレベルの伸びしろがまだまだあるということに驚きとやりがいを感じています。」と、現在の職場の充実ぶりと技術者としての自らの成長を実感する。

見沼基幹線水路

機構職員としてのこれから

田中は自分の強みとして、「現場技術員だったことから機構内、他公共機関、現場技術業界内、ゲートメーカー業界内に沢山の先輩・後輩・知人がいることから、判らないことがあっても迅速に対応できる」ことを挙げる。さらに、自らの経験者採用者としての水資源機構での役割は、「自分の知っていることや、経験したことを全て出して知識共有を行い、水資源機構全体の技術力の向上、底上げに貢献することだと考えています。」と、経験者としての自覚を前面に見せる。

また、志望動機との一つにもなった南摩ダムの選択取水設備建設に話が及ぶと、「将来絶対やりたい、いや、やります！！」と、将来南摩ダムの工事現場に立つ自分の姿に思いを馳せて目を輝かせた。

田中へのインタビューで特に印象に残ったのは、「地域に根づいた形で」業務を行うことの必要性に再三触れていたこと。過去、数々の工事現場で現場代理人として近隣住民との良好な関係の構築に腐心してきた田中のこの言葉には、新卒入社ではなかなか見せられない重みを感じた。